

## お別れの言葉

小山剛さんの、あまりにも早すぎるご逝去を心から悼み、慎んで哀悼の言葉を捧げますとともに、ご遺族の皆様にご心よりお悔やみ申し上げます。

小山さん、あなたは私が初めて市長選挙に立候補する際、お酒を手土産に私の家に来てくださいました。あなたの思い描く福祉のあり方などについて、酒を酌み交わしながら熱く語り合ったことが、今も目に浮かんでまいります。

それ以来、小山さんは福祉施策に関する様々な最新情報やアドバイスをくださり、私を支えてくださいました。

小山さんは、昭和五十七年に開設されたばかりの特別養護老人ホームこぶし園に勤務されて以来、三十二年にわたり長岡市とともに二人三脚で高齢者福祉に尽力され、時代に先駆けて全国モデルとなるような数多くの功績を残されました。

例えば、現在全国に普及している「在宅介護サービス」の原型を創り上げられました。平成二年に国のモデル事業としてショートステイ専用施設を開設され、平成七年には二十四時間三百六十五日対応のホームヘルプサービスを開始されるなど、当時、日本中どこにもなかった理想のサービスを目指して、いち早く実践されました。

また、住み慣れた地域で介護を受けられるように「在宅介護の地域拠点」を実現されました。介護保険制度発足後間もない平成十四年に、現在の「小規模多機能型施設」の原型である「サポートセンター」を開設され、平成十六年には郊外の特別養護老人ホームを住み慣れた地域に分散する「サテライト特養」を構造改革特区として提案されました。

さらに、平成十六年の中越大震災においては、仮設住宅の敷地内に全国初のサポートセンターを開設されました。災害時でも介護を途切れさせてはいけないという小山さんの強い思いは、その後の東日本大震災など、全国の災害現場で活かされております。

長岡市の福祉が全国トップレベルの水準に至ったのは、小山さんがこのような先駆的な事業に積極的に取り組んでこられた成果であります。心より感謝いたします。

そして、これら数々の提案と実践が次々と国のモデルとなり、いま全国で進められている「地域包括ケア」の土台となっています。あらためて小山さんの偉大なご功績を顧みますと、日本の高齢者福祉の宝を失ったことが本当に残念でなりません。

私は、小山さんの高い志を長岡市民の誇りとしてしっかりと受け継いでいく決意です。

小山剛さん、どうか安らかに眠りください。

ご冥福を心よりお祈り申し上げまして、お別れの言葉といたします。

平成二十七年五月二十四日

長岡市長 森 民 夫